

案頭の書

芥川龍之介

青空文庫

一 古今実物語

一

大阪の画工北璿ほくせんの著はせる古今実物語ここんじつものがたりと云ふ書あり。前後四卷、作者の筆に成れる挿画さしゑを交ふ。格別稀観書きかうしよにはあらざれども、聊か風變ふうがはりの趣おもむきあれば、そのあらましを紹介すべし。

古今実物語は奇談二十一篇を収む。その又奇談は怪談めきたれども、実は少しも怪談ならず。たとへば「幽霊いゑん二月堂にぐわつだうの牛王ごわうをおそるる事」を見よ。

「今西村いまにしむらに兵右衛門へいゑもんと云へる有徳うとくなる百姓ありけるが、かの家にめし使ふ女、みめかたち人にすぐれ、心ざまもやさしかりければ、主の兵右衛門あるじおりおり忍びしのかよひける。此主が女房ねたみ、妬ねたみふかき者なるが、此事をもれ聞きて瞋恚しんいのほむらに胸をこがし、奴しもをとこをひそかにまねき、『かの女を殺すべし、よく仕了しおほせなば金銀あまたとらすべし』と云ひければ、この男も驚きしが、元来慾心うけあふかき者なれば、心安く受合うけあひける。(中略) 下女しもをんな (中略)

何^{なに}心^{こころ}なくあぜつたひに行く向^{むか}うの方^{かた}、すすきのかげより思^{おも}ひがけなく、下^{しも}男^{をとこ}横^{よこ}だきにして池^{いけ}中^{ちゆう}へなげ入れける。(中略)

「日も西^{せい}山^{さん}にかたむき、折^をふししよぼ／＼雨^{あめ}のふるをいとはず、夜^よ歩^{ある}きをたのしみにうでこきする男^{おとこ}、曾^{そが}我^の宮^{みや}へ日^ひ参^{まゐ}り。此^{ここ}所^{ところ}を通^{とお}りけるに、池^{いけ}の中^{なか}より『もしもし』と呼^よびかくる。誰^{たれ}ならんと立ちどまれば、いぜんの女^め池^{いけ}の中^{なか}よりによつと出^でで、『男^{おとこ}と見^みかけ頼^{たの}み申し度^どき事^{こと}あり』と云^いはせもはてず、狐^{こり}狸^りのしわざか、人^{ひと}にこそより目^めにも見^みせんと腕^{うで}まくりして立ちかかれれば、『いやいやさやうの者^{もの}にあらず。我^{われ}は今^{いま}西^{せい}村^{むら}の兵^{へい}右^え衛^ゑ門^{もん}に奉^{ほう}公^{こう}致^ちすものなるが、しかじかのことにてむなく成^{なる}る。あまりになさけなきしかたゆへ、怨^{うら}みをなさんと一念^{いつげん}此^こ身^みをはなれず今^こ宵^よかの家^{いえ}にゆかんと思^{おも}へど主^{あるじ}つねづね觀^{かん}音^{おん}を信^{しん}じ、門^{もん}戸^こに二^に月^{げつ}堂^{だう}の牛^ご王^{わう}を押^おし置^おきけるゆゑ、死^し霊^{りやう}の近^きづくことかなはず(中略)牛^ご王^{わう}をとりのかたまはらば、生^{しやう}々^{じやう}世^せ々^{じやう}御^ご恩^{おん}』と、世^よにくるしげにたのみける。

「かのもの不^ふ敵^{てき}のものなれば(中略)そのところををしへたまへ。のぞみをかなへまゐらせんと、あとにつきていそぎゆく。ほどなく兵^{へい}右^え衛^ゑ門^{もん}が宅^{たく}になれば、女^めの指^{さし}図^ずにまかせ、何^{なん}かはしらず守^{まも}り札^ふひきまくり捨^すてければ、女^めはよろこび戸^{かど}をひらき、家^{いへ}へ入^いるよと見えしが臥^ふしてゐたる女^め房^{ぼう}ののどにくひつき、難^{なん}なくいのちをとりて、おもてをさして逃^にげ出^で

でける。(中略)

「女走りいで、(中略) 此上ながらとてもことにいづくへなりと連れてゆきたまはれど、背につきはなれぬうち、家内^{かない}にわかになれぬ立ち、やれ何者のしわざなるぞ、提灯松^{ちやうちんた}

いまつ

明と、上を下へとかへすにぞ、以前の男も心ならず足にまかせて逃げゆきしが、思はずもわが家にかへり、(中略) ひとり住みの身なれば、誰れとがむるものもなければ、幽霊を連れかへりそざろに気味わるく、『のふく』のぞみはかなひし上は、いつかたへもゆきたまへ、(中略)』と、心のうちに念仏をとなへけるこそをかしけれ。

「幽霊もしばしはさしうつむきてゐたりしが、(中略) 怨めしと思ふかたきをかみころし、一念散ずるときは泉下^{めいど}へもゆくべきに、いまだ此土^{このど}にとどまることのふしんさよと心をつけて見るに、さして常にかはることもなし。(中略) それより一つ二つとはなし合ふに、いよく幽霊にあらざるにきはまりける。(中略) 男も定まる妻もなければと、つひ談^{だんが}合^ふなりてそこを立ちのき、大阪にしるべありてひきこしける。兵右衛門^{へいゑもん}がかたにはかゝることゝは露しらず、本妻と下女^{げぢよ}が修羅^{しゆら}の苦患^{くげん}をたすけんと御出家^{ごしゅつけ}がたの金儲^{かねまう}けとなりけるなり。」

この話は珍しき話にあらず。鈴木正三^{すずきしやうざう}の同一の怪談を発見し得べし。唯北畠^{ほくせん}はこ

の話に現実主義的なる解釈を加へ、超自然を自然に翻訳したり。そはこの話に止らず、
安珍清姫あんちん きよひめの話を翻訳したる「紀州日高の女山伏きしゅうひだか やまぶしを殺す事」も然り、葛の葉くず はの話を翻
訳したる、「畜類人と契ちぎり男子をのこを生む事」も然り。鉄輪かなわの話を翻訳したる「妬女とちよきぶねみやう貴布禰あきふね
明神しんに祈る事」も然り。殊に最後の一篇は嫉妬おにの鬼をにならんと欲せる女、「こは有ありがた
きおつげかな。わが願成ぐわんじやうじゆ就すとよろこび、其ま川へとび入りける」も、「ころしも霜しも
もつき
月下句の事なれば、（中略）四方よもは白たへの雪にうづみ、川風はげしくして、身体しんたい氷
にとぢければ、手足もここへ、すでに息絶いきたへんとせし時、「いつしか妬心としんを忘れしと云ふ、
誰かこの残酷ざんこくなる現実主義者の諧かいぎ諺やくに失笑一番せざるものあらん。

二

更に又「孝子黄金こがねの釜を掘り出し娘の事」を見よ。
「三八さんぱちといへる百姓ひとりは一人の母につかへて、至孝ならぶものなかりける。或年あるとしの霜しもつ
月下句きの頃、母筍たけのこを食し度由たまよしのぞみける。もとより貧しき身なれども、母の好みにまか
せ、朝夕あさゆふの食事をととのへすすむといへ共この筍たけのこはこまりはてけるが、（中略）蓑笠みのかさ

ひきかづき、二三丁ほど有所の、藪を心当に行ける。積る朽葉につもる雪、かきのけくさがせども、(中略) ああ天我をほろぼすかと泪と雪に袖をぬらし、是非なくくも帰る道筋、縄からげの小桶壺つ、何ならんと取上げ見れば、孝子三八に賜ると書付はなけれ共、まづ蓋をひらけば、内よりによつと塩竹の子、金もらうたよりうれしく、(中略) 女房にかくとしらすれば、同じ心の姑思ひ、手ばやに塩だし鰹かき、即時に羹となしてあたへける。其味生なるにかはる事なく、母もよろこび大方ならず、いか成人のここに落せしや、是又壺つのふしぎ也。

「しかるにかほど孝心厚き者なれ共、持げばかせぐほど貧しく成り、次第くゝに家をとろへ、今は朝夕のけぶりさへたえ／＼に成りければ、三八女房に云ふやう、(中略) ふたりが中にまうけし娘ことし十五まで育てぬれ共、(中略) かれを都の方へつれ行き、つとめぼうこう勤奉公とやらんをさせ、給銀にて一持して見んと思ふはいかにと尋ぬるにぞ、わらはも疾くよりさやうには思ひ候へ共、(中略) と答へける。(中略) 三八は身ごしらへして、娘うちつれ出でにける。名にしおふ難波の大湊、先此所へと心ざし、少しのしるべをたずね、それより茶屋奉公にいだしける。(中略) 扱此娘、(中略) つとめに出る其日より、富豪の大臣かかり、早速に身うけして、三八夫婦母おやも大阪へ引きとり、

有りしにかはる暮くらしと成り、三八夏は蚊帳かやの代りにせし身を腰こしもと元共に床とこを扇あふがせ、女房は又姑しうとめにあたへし乳房ちふさを虎屋とらやが羊羹やうかんにしかへ、氷こひから鯉こひも古めかしと、水晶の水舟みづふねに朝鮮金魚を泳がせて楽しみ、是これ至孝のいたす所なり。」

天は孝子に幸福を与へず。孝子に幸福を与へしものは何なんびと人かの遺失せる塩竹の子のみ。或は身を売れる一人娘ひとりのみ。作者の俗言を冷笑するも亦また悪あく辣らつを極きはめたりと云ふべし。予はこの皮肉なる現実主義に多少の同情を有するものなり。唯唯作者の論理的頭脳づなうは残念にも余り雋しゆんえい鋭えいならず。「餓鬼聖靈会がきしやうりやうゑを論ずる事」の如き、「寺僧病人問答の事」の如き、或は又「仏者と儒者渡唐とたうてんじん天神を論ずる事」の如き、論理の筆を弄ろうしたるものは如何いかに鼻眞眼ひいきめに見るにせよ、概ね床屋とこやの親方の人生觀を講釈すると五十歩百歩の間かんにあるが如し。因ちなみに云ふ。「古今実物語」は宝曆二年正月出版、土問然とけいぜんの漢文の序あり。書肆しよしは大坂南本町一丁目村井喜太郎、「古今百物語」、「当世百物語」号と同年の出版なりしも一興かならん乎。

二 魂胆色遊懷男

「こんたんのいろあそびふところをとこ魂胆色遊懷男」はかの「まめをとこえどけんぶつ豆男江戸見物」のプロトタイプなり。予の家に蔵するは巻一、巻四の二冊なれども、まめゑもん大豆右衛門の冒険にはラブレエを想はしむるものなきにあらず。

大豆右衛門は洛東山科らくとうやましなの人なり。その母「塩の長次ちやうじにはあらねど、夢中に馬を呑むと見て、懷胎したる子なるゆへ」大豆右衛門と称せしと云へば、この名の由よつて来る所は必しも多言するを要せざるべし。大豆右衛門、二十三歳の時、「さねかづら取りて京の歴々の女中方へ売べしと逢坂山あふさかやまにわけ登り」しが、偶玉たまたぎよくばう貌の仙女せんぢよと逢ひ、一粒いちりつぶの金丹きんたんを服するを得たり。「ありがたくおし頂きてのむに、忽ち其身雪霜の消ゆる如くみぢみぢとなつて、芥子人形けしにんぎやうの如くになれり。」こは人倫の交りまじはを不可能ならしむるに似たれども、仙女の説明する所によれば、「色里いろざとにても又は町家の歴々の奥がたにても、心のままにあはれるなり。(中略)汝なんぢがあふて見度みたしと思ふ女のねんごろにする男の懷ふところの中に入れば、その男の魂ぬけ出いで、汝かり飯に其男に入れかはりて、相手の女を自由にする事、又なき楽しみにあらずや」と云へば、頗る便利なる軋身てんしんと云ふべし。爾来大豆右衛門、色を天下に漁ぎよすと雖も、迷宮めいきゆうに似たる人生は容易に幸福を与ふるものにあらず。たとへば巻一の「姉あねの異見耳痛みみいたいかたぎまくら櫛木枕」を見よ。

「台所より飛びあがり、奥の方を心がけ、襖ふすまのすこし明あきたるあひよりそつと下おりて大座敷へ出いで、（中略）唐更紗たうざらさの暖簾のれんあげて、長四畳ながよでふの間まを過ぎ、一だんたかき小座敷あつて、有明ありあけの火明らかに、是これぞ此家このやの旦那殿だんなの寝所しんじよならめと腰障子こしをすこしつきやぶりと、是より入つて見れば夫婦枕ふうふまくらをならべて、前後も知らず連れ節ぶしの軒いびきに、（中略）先内儀まづないぎの顔をさし覗のぞいて見れば、其美そのしさ此器量こので三十ばかりに見ゆれば、卅五六でもあるべし。（中略）男は三十一二に見えて、成程なるほど強さうな生れつき。扱さては此女房の美しいに思ひつきて、我より二つ四つも年のいたをもたれしか、但ただし入り賀むこか、（中略）と亭主ていしゆが懷ふところにはいればそのまま魂たましひ入れ替り、（中略）さあ夢さましてもてなしやと云へば、此女房目をさまし、肝きものつぶれた顔して、あたりへ我をつきのけ、起きかへつて、コレ氣ちがひ、爰こゝを内ぢやと思ひやるか、夜の更よふけぬ先に往いくと云ふに、面白おもしろうもない歌留多かるたをうつてゐて夜よを更ふかし、今からは往いなれまい、旦那殿だんなどのも大津祭おほつまつりに行かれて留守るすぢやほども、泊とつてなりと行きやと、兄弟かたじの忝かたじけなさは何なんの遠慮えんりょもなく一所に寝るを、姉あねをとらまへ輕きやうこつ忽たちな、こりや畜生ぎやうせいの行儀ぎやうぎか。こちや畜生になる事は厭いやぢやいの。（中略）多聞たぶん悪いと畳たたみを叩たたいて腹はらを立てる。扱さては南無なむさん姉ぢやさうな。是は粗相そさう千せん万ばん、（中略）と後あと先揃きはぬ事を云ふて、又本もとの夜着よぎへこそそはいつて、寝るより早く其処そこを立ち退のき、

(下^げり
略^{やく})
「
(この項未完)

(大正十三年六月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

2010年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

案頭の書

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>